

英語科目におけるオブザベーションウィーク (相互授業参観) の試み*

小田登志子 土屋園子

Introducing Peer Observation to English Courses at a Japanese University

Toshiko Oda Sonoko Tsuchiya

Abstract

The purpose of this article is to report the outcome and findings of a peer observation called “the Observation Week,” which was conducted by the English Group at Tokyo Keizai University for 3 years, from 2006 to 2008. During the Observation Week, all the English Communication I courses were open for free observation among English instructors. It was confirmed that the Observation Week provides valuable on the job training to teach small-sized conversation classes, which are not yet popular at Japanese universities. At the same time, it was pointed out that mutual trust among instructors is essential to successful peer observation.

1. はじめに

本稿の目的は、東京経済大学3学部（経済学部・経営学部・現代法学部）の必修英語科目である「英語コミュニケーションⅠ」で2006年度より3年間にわたって行われた「オブザベーションウィーク」と呼ばれる授業参観の試みを記録し、その成果と課題を明らかにすることである。

近年、大学において授業改革の重要性が叫ばれている。授業改革の手法の一つとして、授業参観も盛んになりつつある。しかし、その多くは専任教員の間だけできわめて限定的に行われることが多い。しかし、東京経済大学で行われたオブザベーションウィークは、英語科目の一部に限定してではあるが、非常勤教員を含む全教員が教室を公開する点において、他校の試みと異なっている。また、この活動が英語教員の間できわめて自主的に始められた点

も特徴であると言える。

2006年度から3年間実施されたオブザベーションウィークは、教員同士の学び合いを促進するという点で一定の成果を収めた。しかし参観は強制ではないので、参加する教員が限られた点が課題として残った。そして、参観できる時間が限られている非常勤教員が、より参加しやすいシステム作りをする必要性が確認された。また、参加者の間の信頼関係が欠けていると、かえって否定的な雰囲気をもたらすという指摘がなされた。今後、実りある活動を行うためにはこのような課題を解決しなければならない。

本稿の構成は以下の通りである。2章では、近年の高等教育機関における授業参観の様子について記す。3章では、英語教育におけるピア・オブザベーション（教員相互の授業参観）の重要性について先行研究を引用する。4章では2006年度から2008年度の3年間にわたって実施されたオブザベーションウィークの概要を示す。5章では、筆者2名が参加者と主催者の立場から、オブザベーションウィークの成果と課題について考察する。6章にまとめを記す。

2. 大学FDとしての授業参観

大学教育における教員相互の授業参観は、一般的とはいえないものの、徐々に広まりつつある。文部科学省の2008年6月3日付け報道発表によると、平成18年度にFD（ファカルティ・ディベロップメント）の一環として教員相互の授業参観を実施した大学は、国立大学61校、公立大学21校、私立199校の合計281校に上る¹⁾。これは、講演会等の開催（計416校）などに比べれば少ないものの、授業参観が教育改革の上で重要な手段として認識されていることを示す数値であるといえる。

授業参観を実施している大学は、何はともあれ、その前向きな姿勢が評価されるべきであろう。しかし、その効果はどうであろうか。南木・高尾（2006）によると、いわゆる一般的な公開授業では、あらかじめ指定された日時に指定された教員が授業を公開するという形が多いと報告されている。このような形式の授業参観にももちろん意義はあるものの、短所があるのも否めない。まず、指定された教員以外は授業を公開する機会がなく、全学的な授業の質の向上がどれだけ見込めるかは定かではない。また、授業を公開する側は、どうしても公開用の特別な授業を用意することが多く、本来の目的のために最も大切な普段の授業の質の向上が図られるかは疑問の余地がある。

一部の大学では、さらに進んで全学的な授業公開をする試みも見られる。大同工業大学は、1999年度より全学的な教育改革に着手し、「すべての授業は公開される」という授業憲章を2001年に採択している。授業開発センターが中心となって参観システムを整えており、学内の職員や大学外部からの希望者にも参観を認めている。そして、その成果を「授業批評」

にまとめている。ただし、このような周到なシステムの下では約100人の専任教員の授業公開を一巡するのに3年程度の時間がかかっている²⁾。

同じように、専任教員全員の授業を原則公開としている例としては、流通科学大学が挙げられる。流通科学大学では、2003年度後期から3週間（当初は2週間）にわたって全ての授業を原則として公開し、相互に参観し合う制度を導入した。流通科学大学ではこの制度を「オープンクラスウィーク」と呼んでいる。この制度は、あくまでも普段の授業の様子を見ることを趣旨とし、参観者の有無が直前にならないと分からないような仕組みを取り入れ、人に見せるための特別な授業を事前に準備することがなるべくできないようにしている（南木・高尾 2006）。流通科学大学では、こうした取り組みの成果を「工夫改善事例データベース」として学内公開している。また、学生による授業アンケートを通して、授業に対する満足度ならびに理解度の推移を毎年前期・後期にわたって行い、成果を確認している。

大同工業大学と流通科学大学の取り組みは、どちらも全学的に行われ、予算・人員をかけているという点で似ている。しかし、「授業参観と授業研究をきちんと行うには、信じられないほどもエネルギーと人手が必要³⁾」であるため、このような大々的な取り組みに踏み出すには躊躇する大学もあろう。また、お互いの授業を見る文化がない日本の大学では、授業参観に一種の警戒感を持っている教員も少なくないため、大掛かりな導入が難しい場合もあり得る。事実、一部メディアでも日本の大学での授業公開には「根強い抵抗感」があると報道されている⁴⁾。

以上、大学FDの一環としての授業参観の実態を紹介した。一部に意欲的な取り組みが見られるが、全体としては、日本の大学ではこのような取り組みはなかなか広まらないというのが現状である。そのような状況の中で、英語科目は大学において授業公開を比較的始めやすい科目として注目できるのではないだろうか。TESOL/TEFL（第二言語としての英語教授法・外国語としての英語教授法）の分野では、教員養成の手段としてピア・オブザベーションが広く取り入れられている。そして、なぜピア・オブザベーションが有効であるかという議論もすでに確立している。次の章では英語教育先進国アメリカでの先行研究を例に挙げ、授業参観の有効性についてまとめる。

3. TESOL（英語を母語としない人を対象とした英語教授法）分野におけるピア・オブザベーション

教員の自己研鑽（あるいは相互研鑽）の方法の一つとしてのピア・オブザベーション（教員相互の授業参観）は、TESOL（英語を母語としない人を対象とした英語教授法）分野においてこれまでに様々な研究者によって提唱されてきている。そこではピア・オブザベーションは教員の教育技術の査定のための授業参観とは性質を異にしており、はっきり区分され

るべきであると述べられている（Bailey, Curtis, & Nunan, 2001, Richards & Farrell, 2005）。つまり、授業を参観する側の教員と参観される側の教員が対等な関係でお互いに学ぶというスタンスである。

Richards & Farrell (2005) は、ピア・オブザベーションがもたらす教育技術の向上と教員同士の交流の両方のメリットについてまとめている。前者については、経験の少ない教員は経験豊富な教員の授業を観察することから学ぶことができ、また経験豊富な教員も日頃の授業で抱える問題に他の教員がどう対処しているかを観察したり、自分がまだ知らない効果的な指導法について発見する機会もあると指摘している。後者については、通常会って話す機会のなかった教員同士が、授業参観あるいは参観されることによって、彼らが持つ専門知識や授業に関するアイデアが共有され、またはそれぞれが抱える問題を話し合う機会がもたらされると述べている。大学というコミュニティにおける教員同士の交流の重要性に関しては、Wood & Murphy (2007) が常勤講師を含む教員同士が協力的な関係を構築し個々の教員がもつ知識が共有されることにより、より良い語学教育を提供できると論じている。

このように、ピア・オブザベーションは個々の教育技術の向上だけではなく、教員同士の交流によって授業へのアイデアや指導上の問題解決につながる会話が生まれることも期待できる。本学のオブザベーションウィークが組み込まれている必修英語科目「英語コミュニケーションⅠ」は共通シラバスが設けられているが、シラバスの詳細は個々の教員に裁量が与えられている。担当教員はそれぞれの専門分野における知識や独自の教授法をシラバスに反映させることができる。つまり、各担当教員がその強みを反映させた授業を公開することにより、各教員同士が持つ知識や教授法を交換していくことが可能になる。また、オブザベーションウィークが始動してから3年目の現時点ではまだ問題点もあり理想論となってしまうかもしれないが、授業を参観したりされたりした教員がお互いにフィードバックをしたり、指導上抱える問題などもオープンに話し合えるようになれば、友好的かつ協力的なコミュニティが構築され、より良い語学教育の提供につながるであろう。

次に、具体的にピア・オブザベーションで何をどのような方法で観察するかであるが、参観する教室での様子を記録する方法としてよく使われるものにチェックリストがある。Richards & Farrell (2005) はチェックリストの長所として、授業のある側面に絞った情報を収集するのに役立つと述べている。しかし、授業の中の瑣末な部分にとらわれがちになるという短所にもふれている。そして、何に焦点を当てて授業を観察するかその典型的なものとして、授業内活動の時間配分、どのようにタスクを与えるか、黙っている学生への対処、学生への質問の仕方、などを挙げている。このような一般的な指導法に焦点を当てて授業を観察する他に、各教員が抱える問題を他の教員がどのように対処しているかに焦点を絞って授業を観察することも有益である。ただし、Baily, Curtis, & Nunan (2001) は、他の教員の教室を参観するに先立って、簡単なガイドラインを設けておくことを提唱しており、チェッ

クリストのようなツールに関しては、参観する際にその教員に学生が不快にならないかを確認してもらい使用するべきとしている。

以上は TESOL 分野における教員の自己研鑽の一つの方法としてのピア・オブザベーションについての簡単な説明であるが、ここでの提言は主として米国などで ESL（第二外国語としての英語）にたずさわる研究者によるものであり、これらを直接取り入れて文化の違う日本の大学の語学教育の現場においても有益になるかについては今後検証を重ねていく必要があると言える。しかし、日本の高等教育において FD の一環としての教員相互の授業参観の重要性が認識され始め、施行した大学から一定の成果が伝えられている今、TESOL 分野における研究者の提言から学べることは大いにあると言ってさしつかえないだろう。

4. 東京経済大学におけるオブザベーションウィーク

この章では、東京経済大学で 2006 年度より行われているオブザベーションウィークと呼ばれる授業参観の制度についてその概要を記す。この制度は前章で紹介したピア・オブザベーションをモデルとして、教員相互の学び合いを目的としている。また、導入を容易にするため、大掛かりなシステム等を用いず、あくまでも英語教員間での自主的な活動として始められた。

まず、対象科目となった「英語コミュニケーション I」とはどのような科目か説明し、なぜこの科目で参観を企画したのか理由を記す。次に、オブザベーションウィークのシステムを紹介した後、実際の様子について述べる。

4.1 「英語コミュニケーション I」について

オブザベーションウィークの対象になった「英語コミュニケーション I」は英語カリキュラムの必修科目である。東京経済大学では 2006 年度に英語カリキュラムが改定され、英語必修科目は「英語コミュニケーション I」、「英語プレゼンテーション I」、および「英語 e ラーニング I」の 3 つとなった。

(2) 必修英語カリキュラムの概略図⁵⁾

一年次（8 単位）

第 1 セメスター	第 2 セメスター
英語 e ラーニング Ia（2 単位） （基礎力養成，TOEIC 対応） 36 名クラス・授業＋課題学習	英語 e ラーニング Ib（2 単位） （基礎力養成，TOEIC 対応） 36 名クラス・授業＋課題学習
英語コミュニケーション I（2 単位）	英語プレゼンテーション I（2 単位）

英語科目におけるオブザベーションウィーク（相互授業参観）の試み

(対人発話基礎表現習得) 18名クラス・週2回授業	⇔	(パブリックスピーキング基礎養成) 18名クラス・週2回授業
------------------------------	---	-----------------------------------

各科目の内容はおおよそ次の通りである。新カリキュラムは全体として、発信型の授業（「英語コミュニケーションⅠ」・「英語プレゼンテーションⅠ」）と学習型の授業（「英語eラーニングⅠa・Ⅰb」）の2本立てで構成されていると言える。

(3) a. 「英語コミュニケーションⅠ」

週2回，1クラス最大18名の少人数教育。日常生活のコミュニケーションに必要な表現を学ぶ。様々なアクティビティーを通して発話の練習を行なう。

b. 「英語プレゼンテーションⅠ」

週2回，1クラス最大18名の少人数教育。自己紹介，自分の意見などを短いスピーチにまとめ，聴衆の前で発表する訓練を行なう。

c. 「英語eラーニングⅠa・Ⅰb」

教員が行なう通常授業が週1回，学生のみで行なう課題学習が週に90分。1クラス最大36名。アルク社の英語学習ソフト「ネットアカデミー」を使用し，リスニング・リーディングを強化するとともに，TOEIC対策を行なう。

「英語コミュニケーションⅠ」は18人の少人数編成となっているが，このクラス分けについては4月の入学時にプレースメントテストを行い，習熟度別にクラス編成をした。さらに便宜上，全体を3つのグループに分けて，上位（advanced）・中位（intermediate）・下位（novice）と呼ぶ^{6,7)}。

(4) 習熟度別クラス分け

下位（novice） 25%	中位（intermediate） 60%	上位（advanced） 15%
-------------------	-------------------------	---------------------

このように，「英語コミュニケーションⅠ」では，習熟度別・週2回・少人数のクラス編成が行われるようになったため，発話の習得にきわめて良い学習環境が整ったと言える。しかし，制度面はずいぶん整ったものの，それですぐに教育効果の高い授業が提供できるようになったというわけではない。実際に教える教員が，スピーキング力を発達させるための教育技術を持っていなければ，「英語コミュニケーションⅠ」の目標は達成されない。これが，オブザベーションウィークを導入するようになったきっかけである。次のセクションで

は、この科目で参観を導入した理由について詳しく述べる。

4.2 「英語コミュニケーション」で参観を導入した理由

新カリキュラムと共にスタートした「英語コミュニケーションⅠ」での最大の懸念は教員の教育技術であった。「英語コミュニケーションⅠ」を担当するのは毎年おおよそ40名の教員だが、そのうち約30%がネイティブスピーカーで、残りは日本人の教員である。ネイティブスピーカーの教員は従来からスピーキングの授業を担当していることが多かったため、「英語コミュニケーションⅠ」の導入は、さほど大きな変化とは映らなかったであろう。問題となったのが日本人の英語教員である。日本人教員の多くはそれまで文法・読解・英語試験対策など、いわゆる講義形式の授業を担当してきた者が多く、スピーキングの授業をするのは始めてで不安だという声も多く聞かれた。また、新カリキュラム発足に当たって新しい非常勤教員を多数採用したが、その中には大学院を卒業したばかりで教育経験が極めて少ない若手も含まれていた。したがって、「英語コミュニケーションⅠ」に適した教育技術の研修を行うことが早急な課題として浮上した。

このような場合には、専任教員の中で技術のある者が指導・助言を行うべきであるかもしれない。しかし、新カリキュラム発足を前に、東京経済大学では偶然に教員の退職や転出が重なり、結局「英語コミュニケーションⅠ」の世話役になったのは、英語を教え始めて3年目という経験の少ない筆者（小田）と若手の特任講師の柳瀬実佳氏であった。しかし、この問題は必ずしも当時の東京経済大学に特有ではなく、ある程度一般的に見られる問題だと考えられる。必修英語はどの大学にもあるが、すべての大学にベテランの英語教育の専門家がいるとは限らない。では、そのような場合、現場の教育技術を改善するためにはどのような対策が可能であろうか。

一つの答えが教員相互の授業参観である。非常勤を含めた教員の中には教歴が長く、スピーキングの指導に優れた者もいる。また、ネイティブスピーカーの教員や、日本人教員でも英語圏で教育を受けた者にとっては、少人数でインタラクティブな語学の授業は極めて慣れ親しんだ授業体系である。このような教員の人的資源を有効に活用することにより、必ずしも専任教員の中に英語教育の専門家がいなくても教育技術の普及を進めることが十分可能であると考えた。

授業参観を導入しようと考えたもう一つの理由は、教員同士の交流を促進したいと考えたからである。新カリキュラム導入に合わせて新しく非常勤教員を多数採用したため、教員の中には以前から勤務しているグループと、新たに勤務を始めたグループが出来上がっていた。この新旧2つのグループがお互いのことをよく知るためにも、授業参観は有効であると考えられた。

4.3 オブザベーションウィークのシステム：「お隣をちょっと拝見」のしくみ

2006年から2008年現在までに、オブザベーションウィークを3回実施した。まずは大まかな概要を下のようにまとめる。この制度は、参加する教員の中で非常勤講師が多数を占めていることから、他校の公開授業にはない仕組みとなっている。また、上に挙げた大同工業大学や流通科学大学の場合と比べると、かなり低予算で手間隙をかけないインフォーマルな形であると言える。

(5) オブザベーションウィークの概要

- a. 目的：教育技術の研修と教員同士の交流の促進
- b. 期間：6月下旬の1週間
- c. 参観の対象となる科目：全ての「英語コミュニケーションⅠ」⁸⁾（2008年度の場合、担当教員は合計40名。内訳は専任教員4名、特任講師5名、非常勤講師31名。）
- d. 参観者：上記の公開科目担当教員40名を含む3学部（経済学部・経営学部・現代法学部）の英語教員（2008年度の場合50名。）
- e. 参観の方法：期間中、対象となるクラスを事前のアポイントメント等なしで自由に参観できる。
- f. 特例：参観したいクラスと自分の授業の時間が重なる場合は、30分程度を限度に学生に自習させるか、あるいは最初か最後の30分の授業をキャンセルしても良い。
- g. 告知の方法：オブザベーションウィークが始まる2週間ほど前に、対象となるクラスの担当者、教室番号を記した一覧表を配布するとともに、教員室に掲示を出す。
- h. 連絡事項：他のクラスを参観するために自分の教室を留守にする場合は、教員室の掲示板に張り出された一覧表にメモを残して知らせる。
- i. 交通費：オブザベーションウィーク期間中に、自分の出講日以外に参観を目的として来校した場合は、交通費が支給される。

次に各項目について補足する。a 目的は既に述べた通り、少人数でスピーキングを教えるための教育技術をお互いから学ぶと共に、教員の間での交流を促進することである。b 期間を6月末の一週間としたのは、授業が軌道に乗り、かつ試験前を避けたこの時期が参観にふさわしいと考えたからである。c 参観の対象となる科目については上に理由を述べた通り、少人数でスピーキングを教えた経験が少ない教員が「英語コミュニケーションⅠ」を担当する現実を踏まえてのことである。d 参加者は3学部の全英語教員とし、「英語コミュニケーションⅠ」を教えていない教員も参加できることとした。これは、どの教員も「英語コミュニケーションⅠ」を教える可能性があるため、将来にそなえるという目的があると同時に、「英語Eラーニング」を担当する教員が必修英語のもう一つの柱である「英語コミュニケー

ションI」を見学することにより、科目相互の補完関係をより体感する機会になると考えたからである。

e. 参観の方法は自由参加とし、参観したい者が好きなクラスを自由に見学できることとした。他校の例によく見られるような、事前の申し込み等は一切省き、見学者は好きな時間にクラスに入り、好きな時に退室して良いこととした。したがって、場合によっては15分程度という短い参観もあった。このような短い時間の参観でもある程度の参考になるのは英語科目の特質であろう。他の講義科目と異なり、英語のスピーキングの授業では、1時限の授業の中でいろいろなアクティビティを織り交ぜて教えることが多く、15分でも一つのアクティビティの様子を理解することは十分可能である。

f. 特例は東京経済大学オブザベーションウィークの最たる特徴であるといえる。「英語コミュニケーションI」を含む英語必修科目は月曜から土曜の1時限と2時限に開講されている。したがって、「英語コミュニケーションI」を見学したい英語教員のほとんどは同じ時間帯に自分の授業を抱えている。この問題を解決するために、事前に配布された一覧表(g. 告知の方法)を見て、自分の授業時間内に他の授業を参観したい場合は、30分程度自分の学生を自習させるか、授業の最初あるいは最後をキャンセルしても良いことにした。30分程度の時間があれば、一つか二つの教室をのぞくことは十分可能である。言ってみれば「隣の様子をちょっと拝見する」というのがオブザベーションウィークの趣旨である。ただし、他の見学者のために、自分のクラスのキャンセルの予定などを、教員室の掲示板にある一覧表に書きこむこととした(h. 連絡事項)。もちろん、自分の出講日以外に参観をすれば、もっとゆっくりと見て回ることができる。この場合、大学側から交通費が支給された(i. 交通費)。しかし、非常勤教員のほとんどは、東京経済大学の出講日以外には他校での勤務が入っていることが多いため、出講日以外に参観をした非常勤教員はそれほど多くなかった。

4.4 オブザベーションウィークの制度上の利点と問題点

全学的に行う授業参観と比較して、東京経済大学3学部英語グループで行ったオブザベーションウィークは、比較のカジュアルで小規模なものである。制度的に見た利点と難点を下のようにとまとめる。

(6) オブザベーションウィークの利点

- a. 人手・費用・専門家なしでも実施できる。
- b. 学会などでは学べない「明日から役に立つ」現場の技術の交換ができる。

まず、大規模でフォーマルな授業参観と比較して、この程度の規模の参観を企画することはそれほど大変ではない。事前の申し込み等の手順を省いたため、企画する側の手間は、基

本的に日次を設定して教員の名前と教室の場所の一覧を配布しただけであった。従って、英語教育の専門家でなくても十分対応できる内容である。このように、実施が容易であることは、活動を長く継続してゆく上で大事な条件であると思われる。そうでないと、予算がないから活動ができなくなった、あるいは担当する人がいなくなったら活動ができなくなった、等の問題が起こりかねない。

二つ目の利点は、現場ですぐに役に立つ教育技術が学べるという点である。教育技術の普及を目的とした学会・ワークショップ等は数多く存在する。しかし、そのほとんどは講師による発表として行われることが多く、特に大学レベルでは実際の教室を見て学ぶ機会はほとんどない。しかし実際の教室を見学すると、机の配置・インストラクションを英語にするか日本語にするか・遅刻してきた学生にどう対応するか、など様々な面について学ぶことができる。これらの点は、学会で発表対象になるような話題ではないが、日々の授業をこなしていく上ではとても重要である。また、英語教育学会等では扱われにくい基本的な事を見直す機会が得られるもののオブザベーションの利点であろう。学会では新しい提案を扱うことが主なので、基本的な教育技術が話題に上ることは少ない。

気軽に実施できる半面、制度上の難点もあげられる。

(7) オブザベーションウィークの制度上の難点

- a. 参観は強制ではないので、参加する教員が限られる。
- b. 参観できる時間帯が限られることが多いため、授業全体を見ることができない。

a. 参加する教員が限られるという問題は、他校の公開授業の実践でも見られ、東京経済大学も例外ではない。特徴的なのはb. 参観できる時間帯が限られるという点であろう。15～30分の参観は中途半端になりやすく、見る側としては少々物足りなく、見られる側にとっては、自分の授業の意図が正しく伝わらないという不満を残す結果となりかねない。実際どうであったかは5章で詳しく述べる。

4.5 オブザベーションウィークの様子

期間中は、教員が教室一覧表を片手に廊下を教室から教室へと行き来する姿が見られ、ある程度活発な参観が行われた。筆者（小田）の個人的な体験の範囲ではあるが、少し様子を記したい。

該当科目は全クラスが公開の対象となった。ただし、テストを行う等の理由で参観の時間に制限を設けた教室がいくつかあった。参観する教員はある程度限られるだろうという予測があったが、実際は「英語コミュニケーションⅠ」担当教員の4-5割程度であったと思われる。

3回の実施を通して、参観する側もされる側も少しずつ慣れてきたように思う。2006年度の第1回目の時は、筆者自身初めての体験でどのようにふるまうて良いのかわからず、こわごとと教室に入った後、隅に座ってなるべく邪魔にならないようにしていた。しかし、これではかえって悪い印象を与えるのではないかと思い、2007度と2008年度では、思い切って授業に参加する形で参観することにした。これはもちろん授業を担当している教員の了解がなければならない。しかし、どの教員もたいていは心よく参加を認めてくれ、学生といっしょにペアワークなどを行って、学生と同じ体験をすることができた。たいていのクラスでは、このように親しく接したほうが、参観者に対する学生の緊張も少ないように感じた。授業をする教員のほうもだんだん慣れてきて、年度が進むごとに、参観者を巻き込んで授業をすすめる教員が増えたように思う。「では今日はゲストの人に英語で質問してみましょう」といった具合である。また、参観者のためにティーチングプランのコピーを用意する教員もいた。

また、オブザベーションウィークには当初予想しなかった意外な反応もあった。まず学生にとっては、ゲストと先生が英語でやりとりしているのを見るのがとても興味深かったようである。多くの学生は、英語が実際に使われているシーンを目の前で見る機会が今までなかったようだ。また、もう一つの英語必修科目である「英語Eラーニング」を担当する教員からは、「自分が担当する学生が少人数クラスで活発に活動しているのを見て驚いた」という声が上がった。「英語Eラーニングは」一クラスの人数が最大36名と、「英語コミュニケーションI」の2倍であるため、講義スタイルの授業が中心となる。したがって学生個人のパフォーマンスを見る機会は少なくなる。参観者は自分が担当する学生の別の一面を発見して興味深かったようである。

以上にオブザベーションウィークの制度の説明と、制度上の利点・難点、および実際の様子の観察を述べた。次の章では、オブザベーションウィーク成果と課題について考察する。

5. 考察

この章では、オブザベーションウィークの成果と課題を二種類の教員の立場から考察する。一つは参加する教員の立場から、もう一つは主催する教員の立場からである。参加する教員の考察は非常勤教員の立場から行う。4章で述べた通り、オブザベーションウィークの対象となる東京経済大学3学部英語の英語教員の大多数は非常勤教員であるため、これらの教員の感想を考慮することが制度の成功に不可欠だからである。次に主催者の専任教員の立場から考察を行う。教員が参加しやすいシステムにするにはどうすべきか、現時点での考えを述べたい。

5.1 参加者の立場から見たオブザベーションウィークの成果と課題

2006年度から本学で非常勤講師として教え始めた、大学での教育経験が浅い筆者（土屋）の視点から、これまで3回参加したオブザベーションウィークがもたらした教育技術の向上と人的交流の面での成果、そして課題について書いて記したい。

教育技術の向上に関しては、オブザベーションウィーク導入の初年度大学で教えるのは初めてだった筆者にとって、この機会から得たものは多かった。まず、他の教室を訪問していくことで本学の学生の全体像が把握でき、教授法や指導法を考える上で役立った。具体的には、習熟度別に行われている「英語コミュニケーションⅠ」の各レベルの授業を参観することで、例えばこの段階では基礎力をつけさせることに重点を置いた方がいいのだとか、さらに上の段階では難易度の高い課題を与えることが学生にとっていい意味で刺激になっているのだな、といったことがより明確になり、自分の授業を見直し、学生への適切な教授法を考える手助けとなった。また、筆者の担当するクラスでは、言語不安など様々な理由から授業中のアクティビティに消極的な学生、さらに英語を話すことに比較的積極的な学生がいる陰で沈黙している学生の姿があった。他の教員の授業を訪問することで、どの学生も抵抗なく英語を話せる環境づくりやクラス全員に均等に英語を話す機会を与えるような工夫を凝らしたアクティビティなど多くを学ぶことが出来た。また、直接問題解決にいたらなくても、同様な問題を抱えている教員と話をする機会があっただけである種の安堵感を得られたこともある。

そしてこのオブザベーションウィークの副産物と言えるのが、他の教員と知り合う機会が得られたことである。オブザベーションウィークの初年度は、スケジュールを調整して出講日以外の曜日の授業も参観した。日頃時間単位で仕事をしているため、このような機会がない限り他の出講日の教員と知り合うことも話をすることもない。授業に関するアイデアや問題の解決は他の教員との会話の中から生まれることも多い。そんなわけで、多くの授業を観て、多くの教員と知り合うことは有益であるし、その後FDミーティングなどで教授法や指導法についてくわしく教えていただくことも出来た。

最後にオブザベーションウィークが残す課題として筆者が感じたいことをいくつか挙げておきたい。まず時間的制約から1つの授業を最初から最後まで参観するという事は出来ず、授業の一部の参観となったことである。訪問先の教員からも、「できれば授業の終盤でなく中盤の頃に来て欲しかった。」などと言われたこともあった。また、昨年は同じ出講日の教員の授業参観しか出来なかったが、自分の授業をキャンセルして他の授業を参観しようとしたところ、多くの教員も同様の行動をとったため、授業の参観が出来なかったこともある。さらに、他の教員が行っている教授法や指導法のすべてが直接自分の授業に活かせるものとは限らなかった。これには様々な理由があり、学生の習熟度に応じたクラス編成では、ある段階にいる学生に対して有効な指導法が別の段階にいる学生に対して必ずしも有効とはいえないという問題があることや、ある教員の教授法はとても参考になったがそれを実践するだけ

のスキルがまだ自分自身になかったということもあった。さらには、交流を持つことができたのもオブザベーションウィークに参加した教員のみであった。しかし、過去3年間他の教員の授業を観たり観られたりすることでよい刺激を受けてきたことは確かであり、FDミーティングなどでオブザベーションウィークの課題点が検討されて多くの教員にとって有意義なものになることを期待したい。

5.2 主催者の立場から見たオブザベーションウィークの成果と課題

上記の参加者の感想をふまえて、今度は主催者（小田）の立場から、この取り組みの成果と課題をまとめたい。「教育技術の向上」および「教員間の交流」という当初の目標はある程度達成されたもの、課題も多く残った。非常勤の教員が参加しやすいシステムを作るとともに、参加者と主催者側の信頼関係を深めることが重要であると思われる。

5.2.1 主催者の立場から見た成果

主催者の立場から見た成果は、大きく次の3点にまとめることができる。

- (8) a. 教員が現場での教育技術を向上させる機会を提供することができた。
- b. 教員間の交流を促進するとともに、各教員の個性をある程度把握できた。
- c. 英語コミュニケーションの授業とはどうあるべきか、実際の現場を通して共通理解を持つ場を提供できた。

次に各点について補足したい。(8a)の「教員が現場での教育技術を向上させる機会を提供することができた」は目標としていた「教育技術の向上」に関する成果である。オブザベーションに参加した教員のほとんどから「ためになった」という声が聞かれた。

(8b)の「教員間の交流を促進するとともに、各教員の個性をある程度把握できた」は、当初目標としていた「教員間の交流を促進」に関する成果である。代表的な感想をいくつか紹介したい。多い感想の一つは「教員の顔と名前が一致した」である。裏を返すと、今まではこのような基本的な事を知る機会も意外と少なかったということだろう。その他に多い感想は「授業の後に話をする機会があった」である。普段教員室で顔を合わせている人同士でも、特に親しくなければ挨拶する程度が普通なので、オブザベーションが話をするきっかけの一つになったと言える。

筆者は主催者としてできるだけたくさんの教室を訪問したが、各教員の特長を知ることができて大変良かった。各教員には研究領域や個性に応じてそれぞれ得意とする指導法があり、オブザベーションを通じてそれらを実際に見ることができた。このため、教員から授業について質問や相談などが寄せられた場合でも、自分自身に知識はなくても「その問題なら〇〇

先生が詳しいですよ」とアドバイスすることにより、ある程度の対応ができるようになった。

（8c）の「英語コミュニケーションの授業とはどうあるべきか、実際の現場を通して共通理解を持つ場を提供できた」は、当初目標には掲げていなかったが、結果として成果があったと思われる点である。授業を見学した教員は皆、同じ科目の授業にもかかわらず、教員によって教え方が様々なことに驚いていた。筆者も同感である。必須英語科目は共通シラバスが出されており、ある程度の指針は示されているが、それをどう解釈し、どのように具体化するかは各教員に任されている。教員の裁量がこのように比較的大きく認められている点については賛否両論があるが、筆者自身の考えでは良いことだと思う。特に現行のカリキュラムでは、4.1で述べたように、各クラスは少人数・習熟度別で編成されているため、各教室の学生は同じ東経大生と言ってもかなり違いがある。各教室の学生に適した指導を行うためにも、教員の裁量の余地を多く残しておくのは良いと思う。しかし、裁量に任される部分が大きいと、教員の独りよがりや思い込みなどで、本来の目的から外れた授業になってしまう可能性も大いにある。この欠点を補うためにも、お互いの授業を見合って、自分のやり方が大きな流れにはずれていないか確認するのは有効であろう。そうすることにより、教師の裁量部分を確保しつつ、全体の目標に沿った授業へと軌道修正できると考えられる。

5.2.2 主催者の立場から見た課題

課題としては次の3点が挙げられる。これは、上記5.1の参加者の立場から見た課題を反映したものといえよう。

- （9） a. 参観の時間不足をどのように解消するか
- b. より多くの教員に参加してもらうにはどうしたらよいか
- c. ある種の評定につながる可能性とどう向き合うか

（9a）の「参観の時間不足をどのように解消するか」は、一番切実な問題である。教員からは代案として、ワークショップを催したり、ゲストを招いて講演会を行ってはどうかという意見があった。実際の教室を見なくても良いと考えるなら、これらの方法も一考に値するだろう。しかし、出講日以外に非常勤教員に來校してもらう必要がある。現在のように教室を公開するスタイルを取りたいのなら、例えば授業期間中を避けた時期に、代表の教師が公開授業を行うという方法もある。これなら他の教員はゆっくり参観できる。しかし、授業時間以外に学生を集めるには様々な制約がある。実際の学生を対象にした授業を行い、かつ教員全員に参観の機会を保障するには、現在のように出講日の日数内で行うのがベストであろう。しかし、参観時間の不足を解消するには、オブザベーションウィーク期間中にある範囲のクラスを完全に休講しなければならないだろう。ただし、これは英語グループ内での自主

企画の範囲を超えるため、大学側の理解と協力を得なければならない。

(9b)の「より多くの教員に参加してもらうにはどうしたらよいか」について。上記5.1の参加者の感想にもあったように、3年間の様子を見ると、参観する教員がかなり固定化してきたように思う。同じ現象は他校の取り組みでも報告されており、「横への広がり」の難しさを東京経済大学でも認識させられた。また、原則として全教室が公開であったが、実際は教室によっては非常に入りにくい雰囲気であったこともあった。これは、大学では今まで授業を公開する文化なかったことを考えると、ある程度理解できる反応ではある。

解決方法は簡単ではないが、まずスタートとしては広報活動をより充実させることが考えられる。今までは、FDミーティングで予定を知らせるとともに、予定表を配布してきた。これに加えて英語教員専用のメーリングリストを作る、頻繁に声かけをするなどの努力が必要であろう。また、参加者の感想を具体的に知らせることにより、この活動に意義があることを積極的に知らせてゆく必要がある。

一番むずかしい問題は(9c)「ある種の評定につながる可能性をどう向き合うか」であろう。特に、非常勤教員がほとんどを占める英語科目では専任教員によるオブザベーションが一種の「勤務査定」と解釈されがちである。また、授業を見られた結果、否定的な感想を持たれるのがいやだという気持は誰の中にもある。教員の一部からは、「信頼関係がないと、かえって否定的な雰囲気をもたらすのでは」という意見が寄せられたが、このコメントは的を得ていると思う。参観をした教員の多くが気が合う者同士で授業を見合っているのは、信頼関係があり、少しぐらいうまくいかなくても受け入れてもらえるとうわっているからだろう。

つまり、オブザベーションに否定的な空気を払拭して、より多くの教員の参加を促すためには、参加者同士が信頼できる人間関係をまず作らなくてはならない。簡単なことではないと思うが、まずは主催者が先頭に立って日頃からコミュニケーションをよく図るなどの地道な努力が必要であろう。これは研究室に閉じこもりがちな筆者が大いに反省すべき点である。また、参観を査定の材料にはしない旨をお知らせ等に明記する必要があると感じた。

6. まとめ

本稿では東京経済大学3学部英語グループが3年間にわたって行ったオブザベーションウィークと呼ばれる教員相互の授業参観の試みを記録し、現時点での成果と課題をまとめた。他校の授業参観と比較して、オブザベーションウィークは人手やお金をかけないシステムである。従って、大学内の小さい単位で試行的に授業参観を行うための一つの方法であると言える。

また、オブザベーションウィークの特徴は、非常勤教員も原則として全員授業を公開する

とともに、全員に参観の機会を保障した点である。現在の大学において、非常勤教員に教育現場の多くを委ねている以上、教育の質を向上させるためには、専任教員だけでなく非常勤教員にも何らかの形でFD活動に参加してもらうことが必要である。この問題は特に英語科目の場合に顕著である。

3年間にわたったオブザベーションウィークは教育技術の研修と教員同士の交流という点である程度の成果を収めたが、課題も指摘された。まず、非常勤教員が参加しやすいシステムを作ること、また有意義な成果をもたらすためには、まず教員間の信頼関係が必要である。

本稿の内容は筆者2名の観察や聞き取りに基づく部分が多く、科学的な調査とは言えない。しかしこの活動を記録することによって、今後のFD活動に役立てるとともに、3学部英語グループの活動への理解が少しでも深まれば幸いである。

注

- * 本稿の執筆にあたり、経済・経営・現代法学部英語グループの先生方から貴重なご助言をいただいた。また、オブザベーションウィークの実施にご協力をいただいた学内関係者の方々ならびに「英語コミュニケーションⅠ」を担当した教員の方々に感謝したい。

執筆担当は次の通り。2章、4章、5章-1を小田登志子が担当し、3章、5章-2を土屋園子が担当した。

- 1) 2008年6月3日付け文部科学省報道「大学における教育内容等の改革状況について：2. 授業の質を高めるための具体的な取り組み状況 詳細」より引用。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061617.htm
- 2) 大同工業大学ホームページ「文部科学省特色 GP 地味な授業改革が大学を変えた」より引用。
<http://www.daido-it.ac.jp/topics/index.html>
- 3) 大同工業大学学長（1999年4月～）長澤岡昭氏ホームページ Sawada Web より引用。
<http://www.daido-it.ac.jp/~sawaoka/kyoiku/index.html>
- 4) 2007年7月13日付 読売オンライン「授業公開 根強い抵抗感」より引用。
<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/renai/20070713us41.htm>
- 5) 詳しいカリキュラムの概略図は東京経済大学全学共通教育センターのサイトを参照のこと。
<http://www.tku.ac.jp/~gakumu/center/>
- 6) これらの呼び方はあくまで大学内の基準に照らし合わせたもので、一般の指標とは異なる。例えば、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) ガイドラインに照らし合わせた場合のおおよその目安は次の通り。

新カリキュラムクラス分け	上位 (advanced)	中位 (intermediate)	下位 (Novice)
ACTFL ガイドライン	Mid-High intermediate	Low intermediate	Novice

- 7) これらの呼び方は、担当する学生のおおよそのレベルを教員側に事前に知らせる事を主な目的として用いられている。学生には特に通知しない。
- 8) 再履修の「英語コミュニケーションⅠ」クラスを除く。

追記 本稿は2006年度東京経済大学個人研究助成費(C) C08-02による研究成果の一部である。

参考文献

- 大同工業大学ホームページ「文部科学省特色GP 地味な授業改革が大学を変えた」<http://www.daido-it.ac.jp/topics/index.html> 2008年7月22日閲覧
- 大同工業大学学長澤岡昭氏ホームページ Sawada Web <http://www.daido-it.ac.jp/~sawaoka/kyoiku/index.html> 2008年7月22日閲覧
- 東京経済大学ホームページ 全学共通教育センター英語カリキュラム <http://www.tku.ac.jp/~gakumu/center/> 2008年7月22日閲覧
- 文部科学省報道(2008年6月3日)「大学における教育内容等の改革状況について：2. 授業の質を高めるための具体的な取り組み状況 詳細」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061617.htm
- 読売オンライン「授業公開 根強い抵抗感」(2007年7月13日) <http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/renai/20070713us41.htm>
- Bailey, K. M., Curtis, A., & Nunan, D. (2001). *Pursuing professional development : The self as source*. Boston: Heinle & Heinle.
- Richards, J. C., & Farrell, T.S.C. (2005). *Professional development for language teachers : Strategies for teacher learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wood, N., & Murphy, T. (2007). From isolation to communities of practice: Benefiting from teacher knowledge. *The Language Teacher*, 31 (3), 13-15.